

せること、および、調査者と対象者との異文化間的人間関係に配慮された方法論に負うところが多いと思われる。

日本の「教育のエスノグラフィー」研究では、方法論議が盛んなわりには、方法論以外の共通したテーマで特集が組めるほどの民族誌が量産されていない。方法論は、設定された研究課題を明らかにするために相応しい方法が選択され、開発されるものであって、今や不足しているのは方法論ではなく、むしろ新しい研究課題を生み出すような理論の体系であろう。そうしたなかで、「文化と人間発達」という研究領域に真正面からアプローチした本書は、引用される文献が固定化してきた日本の「教育のエスノグラフィー」研究に、「民族誌学的観点」に立つ意義を改めて考え直すひとつの好材料を提供している。

ただ、本書のなかで随所にみられる「大人たちには、子どもたちや青年前期

の若者たちの行動に影響を与える大きな力がある」(94頁)という一方向的な前提は、近年の「新しい文化とパーソナリティ」や「ニュー・エスノグラフィー」では必ずしも支持されておらず、子どもの側の積極的・選択的なはたらきかけとの相互作用的關係から見ようとする理論が一般的になりつつある。すなわち、子どもは大人の生活世界の模倣でも直接的な流用でもなく、子ども同士の相互作用によってユニークな仲間文化をつくりだすために、大人の世界からの情報を創造的に借用し、子どもたちの関心に合わせるために大人の世界の情報を変形させていると捉える立場である。こうした近年の理論的動向と本書における各論文のテーマとの関係は、今後、検討されなければならない課題であろう。

◆ A 5判 152頁 本体1,800円
大学教育出版

■ 書 評 ■

中村 牧子 [著]

『人の移動と近代化—「日本社会」を読み換える—』

日本学術振興会特別研究員 鈴木 智道

歴史研究が多方面にインパクトをもたらすことを可能にする条件とは、意義ある問題意識に導かれつつ、「歴史」がその問題を解くための必要不可欠な「手段」として位置づいていること、まさにここにある。しかし、評者の立場から、昨今の「教育の歴史社会学」領域における研究状況をかんがみるに、「歴史」の

自己目的化とそれに伴う問題意識の希薄化という状況が進みつつあるように思われる。なぜ「歴史」を問うのか、「歴史」から何が見えるのか、という歴史社会学の方法論的可能性が鋭く問われる状況に、今まさに直面しているのだといえよう。

そのような状況のなかで、本書は「社

会学の立場から何ができるのか」というひとつの可能性を提示した「近代日本」研究として位置づけることができる。先行研究・外国理論の単なる穴埋め・当てはめとも違うというだけでなく、これまでの歴史研究の「弱点」であった近世以前にまで遡りつつ近代日本について相対化していくという視点や、近代以降における動態的な姿を戦後まで含めて明らかにしようとする姿勢など、そのスタンスには学ぶべきところが多い。

本書の中心的な課題は、前近代社会から近代社会への変化を、移動のあまり起こらなかった社会から移動の増大化がもたらされた社会への変化として語ってきた「近代化仮説」の妥当性について真正面から検証するという大胆かつ野心的な視点に貫かれている。「近代化仮説」は、前近代社会と近代社会を分かつメルクマールとして、移動の量的・形態的な変化とその前提をなす帰属（社会関係へのコミット）の違いに注目し、それら両社会の質的な断絶を強調してきたが、果たしてそれは本当なのか？——本書が問題にするのは、まさしくこの点である。

まず1章で、日本における「近代化仮説」の代表的論者として神島二郎、鈴木栄太郎、柳田國男が取り上げられ、その諸説に表れた移動と帰属に関する共通した認識が抽出された後、2章では、本書における「移動」の視点とそれを規定する社会関係構造についての分析枠組みが理論的に構築される。ここで強調されるのは、移動には事実に（客観的）な移動と社会の成員自身による移動の見え方（＝了解）という二側面があり、この点を明

瞭に区別することの重要性である。

続く3章から6章では、近世から現在に至る過程で起こった変化を、社会関係構造の変化、移動の了解面での変化、移動の事実面での変化の絡み合いのなかから具体的に捉え直す作業を行い、最後に7章では、得られた知見を総合的にまとめあげている（続く付論では、「近代化仮説」が生まれた背景について著者の見解が示されている）。そこで明らかにされた知見を簡単にまとめるとすれば、以下のようなになるだろう。①近世社会は移動が少ない社会だったのではなく、むしろ事実にレベルで移動が活発に行われた社会だった。しかし一方で、この社会は移動に関する了解が欠如していたため、移動が見えにくい社会でもあった。②明治以降についてみると、実は事実にレベルでは量的・形態的に大きな変化があったわけではなく、近世からの一貫した傾向を保持していた。近代で大きく変わったのは、むしろ戸籍や学校教育制度などによって媒介された移動の見え方だった。③近代以降の事実に移動は戦中・戦後の一時期に大きな変化をみせただけで、その前後は、相対的に安定していた。④これらをふまえると、近代化仮説の論者は移動の見え方の変化を事実に移動の変化と見誤ったところに大きな問題があったと結論づけることができる、と。

ここで細かい事実認識の確認や解釈の妥当性について逐一挙げていってもキリがないので（そういう問題が多々あるということでもあるのだが）、以下、比較的大きな問題を2つほど挙げることにす

る。

まず第1に、論証の手続きについて。本書は問題設定—分析枠組み—検証—知見という一連の流れのなかで一見周到かつ明快な論理を編み出していくのだが、しかし肝心要の検証部分について疑問や留保を抱かざるをえないような部分が多くみられた。この問題はひとつに、周到に準備されたはずの「移動」という概念自体が、実は論証のために著者によるさらなる明確な位置づけを必要としているという事態に由来している。「移動」が時に地域移動を、時に職業移動を指すといった分析レベルのズレや学校の果たす機能を「社会的再生産」に一面的に過小評価する姿勢などは、「移動」概念に関する著者と読者の合意が成立していない部分で生じた齟齬の一例である。また、二次資料ではなくオリジナルなデータで勝負すべきだとまではいわないが、検証部分が先行研究のパッチワークのような様相を呈してしまっている部分も見受けられる。これらの点は、せっかくの知見の信憑性という問題にも必然的につながってくるわけだから、いくら配慮してもしすぎることはないように思う。

第2に、本書の「問い」自体の有用性について。もちろん本書の「問い」の立て方は明瞭である。しかし、従来の近代化仮説を書き換え、結論として導き出された「新たな」近代日本社会像というものは、われわれの目から見て、さほど目新しいというわけではない。たしかに多くの論者は「近代化仮説」をそのまま鵜

呑みにしてきたかもしれない。しかし、その他の多くの研究者は、それをあくまで理念型として受け取り、それと現実との偏差について鋭く問題を提起してきたのではないか。著者によって抽象された「近代化仮説」（これ自体も本来の含意を離れて著者に都合のいい形に「加工」されてしまっているという印象を拭うことができないのだが）を批判的に検討するという初発の問題設定にこだわり続けることによって、おそらく重要性においてもっとタイムリーかつ本質的な問題が抜け落ちてしまっている気がしてならない。そこここに散りばめられた着想自体には可能性があると思わせるものが多くみられるわけだから、そうした地点から「問題」を立ち上げていくほうがより生産的であったのかもしれないと思うと残念でならない。

いずれにせよ、本書によって近代日本がどのように「読み換え」られたのか、またその「新たな」見方にどのようなメリットがあるのかという問いを投げかけたとき、本書には少なからず不満も残る。しかし、本書を合わせ鏡にすると、いまや新たな近代社会像の「構想力」こそが問われているのだということを教えてくれたという意味で、またそのためのひとつの重要な素材を提供してくれたという点で、歴史研究の今後を占う有益な著作であることには違いない。

◆A 5判 214頁 本体3,300円
有信堂